

## 「人が一番の財産です」

(株)バイオ病理研究所

国東市に社屋をおく(株)バイオ病理研究所では、病理組織標本の作製と検査を行っています。ここで作られる標本は製薬会社の新薬製造開発などの重要な試験に活用されています。

研究所の仕事には組織片のスライス、染色など経験を要する緻密な作業が多く、部署によっては技術の習得に数年かかるそうです。



金林輝彦さん

骨の組織標本  
(パラフィンに  
包理したもの)

組織標本作りには、  
細かな作業が多い



「こういつた専門性の高い内容ですので、品質を落とさないためにも信頼して仕事を任せられる人というのが一番の財産です。長年勤めてくれた人が結婚や出産で辞めていくことが悩みの種でした」と医学博士でもあ

る研究所の金林輝彦所長はおっしゃいます。

そんな課題の打開策として生み出されたのが「大分市内の分室」の設置。

3年前、優秀で勤続年数も長い社員の結婚退職の申し入れが直接のきっかけでした。結婚を機に大分市に移るといふ彼女に、なんとか勤め続けていただくための苦肉の策だったそうです。

「9年間勤めていただいて、知識も技術もある方だったので引き留めなければと(笑)。分室の設置により、結果として社員にも会社にも選択肢が広がりました」。

今年3月からは、母親の介護のために大分市出身のメンバーが一名分室に加わることに。

人生の過程では、結婚や出産、あるいは看護や介護など、さまざまな状況が生じます。人生のどのようなステージでも「働き続けられる」環境整備は、今後多くの優秀な人材を惹きつける求心力となるに違いありません。

### 社員の声 ～分室にて～

大分市の分室で勤務する湯浅美穂さんは、組織標本

を3ミクロンの薄さにスライスする薄切という作業を担当しています。

「分室を作っていただけると聞いた時は、うれしかったですね。主人も大賛成で、すぐに快諾しました。信頼を裏切らないように、頑張らないといけないと感じています」と湯浅さんはおっしゃいます。今はバイオ病理研究所を、一生働く職場だと考えているそうです。

家庭では、一歳半になるお子さんの子育ての真つ最中だという湯浅さん。「やはり、これからの企業は子育てしている女性への理解がないといけないと思います。子育てには、子どもの病気など突発的に起こる事情も多いですから」。

春から二名体制となる分室。湯浅さんは今度はリーダーとして活躍します。仕事と生活をうまく調和しながらいきいきと働く様子が印象的でした。



分室勤務の湯浅美穂さん